妖怪町騒動

鈴鳴月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪町騒動

【Nコード】

N2076W

【作者名】

鈴鳴月

【あらすじ】

妖怪の住む街、妖怪町の話

狛犬の灸と聖が事件を解決したりします

狐が攫われた。

九月半ばの日暮れ一番、妖怪たちに伝わったのは恐ろしい報せだった。

狐 白狐と黒狐。妖怪たちの住むこの町を統べる、実質的なりダーである。

そのうちの一人、黒狐が攫われたと言うのだ。

「嫌な風が吹いている」

予言者の夜迷鳥よまいどりが静かな声で正月の祝言の中述べたその言葉は、この一年の間に恐ろしいことが起こることを予言していた。

まさか、その言葉が本当になるとは……。

大騒ぎになる町の中で、神主の服を着た人の姿に犬の茶色い耳と尻尾を生やした狛犬やいとの灸やいとは考えていた。

「キュウ、本当だと思っ？」

同じ家に住んでいる相方の狛犬ひじり、聖ひじりが買ってきた蛙の串焼きをかじりながら言う。こちらも灸と同じ服を着ている。耳と尻尾の色は黒だが。

「……白狐様が言うならば本当のことなのだろう。セイ、武器の手入れをしておけよ」

灸と聖は、それぞれキュウとセイと呼び合っている。自分の本当の名を敵にすぐ知られないためだ。

そして灸と聖はその戦闘能力の高さを買われて、あらゆる敵と戦う時のまとめ役を任されていた。

「うん。キュウの武器も使えるようにしておかないとね」

人懐こい笑みを浮かべて聖は灸に蛙の残りを渡すと、奥の部屋へ引っ込んでしまった。聖はいつも武器の手入れを奥の小部屋でする。そのほうが落ち着くらしい。

「白狐様と黒狐様には多大な借りがある。今こそそれを返す時」
聖の残していった蛙をかじりながら、灸は一人呟いた。そう、余所者だった灸と聖をこの地位までつけてくれたのは何を隠そう白狐様と黒狐様なのだ。この一大事に役に立たないでどうする。
灸は武器の手入れの音を聞きながら、一人静かに考え事をしていった。

次の日。

灸は日暮れとともに起き出した。今日は白狐様から全妖怪町住人に向けて大切な知らせがあるのだ。町の中央付近にある大広間に早めに集まらないといけない。

「セイ、起きろ」

灸は奥の小部屋で武器の手入れをした格好のまま眠っている聖を起こしに行った。何にせ、聖は寝起きが悪いのだ。ここ辺りにも灸が早起きをしなくてはならない要因のひとつがある。

「……」

案の定、聖はその黒い尻尾をぴこぴここと返事代わりに振るだけで起きる素振りを見せなかった。

仕方がないと灸は嘆息し、市場へ食べ物を買いに家を出た。灸も聖も、料理が出来ない。

「今日も早いね、灸」

「要かなめ、お前ほどではない」

蛙を串焼いている店の前で灸は止まった。店主の言葉に返事をし、よく焼けていそうな蛙を見定める。

灸は店の中、本来なら店主がいる所を見やったが、そこはもぬけの空。要はいつも姿を見せないのだ。

「牛蛙の串焼きを二本と、雨蛙の串焼きを二本頼む」

「へいよ。タレか塩、どっちにするかね？」

「全部タシで」

「取りな」

どさりと自分の右隣で音がしたと思つたら、灸の横には注文通りの品が入った紙袋が置かれている。

「代は？」

灸ががま口を出しながら訊ねると、店主は即答した。

「銅を六」

灸はがま口から銅銭を六枚出すと、店の中に放った。ちやりんと金属同士が当たる音がしたかと思うと、投げ込まれた銅銭は全て空中で消えてしまった。

「まいどあり」

店主がそう言ったところから見ると、代はきちんと払えたらしい。灸は傍らの紙袋を抱えると、家に戻った。

「キユウ、何買ってきたの？」

家へ帰ると聖が既に大部屋で寝転んでいた。

「蛙の串焼き」

「やったあっ！」

灸の言葉にそう返すと、聖は飛び起きて灸の抱えていた紙袋を奪い取る。聖は蛙の串焼きが好物なのだ。

「牛蛙一本と雨蛙二本は僕のね」

そう宣言するや否や、ぱくぱくと蛙を平らげてしまう。

「セイ、もうすぐ集会が始まる。準備をしろ」

それを見ながら灸はそう言い、自身も用意をし始めた。

妖怪町の住人全てが集まる大広間。

月も空高く昇り、草木も眠る丑三つ時。

そこに、灸と聖はいた。

「キユウ、皆いるよ。夜迷鳥も、蓮跳びの蛙も。見慣れない人も、たくさん」

「集会だからな。普段は顔を出さない者も皆集まる」

灸と聖はざわつく妖怪達の中、その言葉を交わした。

その時、不意に背後から落ち着いた声が響く。

「そこにいらっしやるのは、ひよっとして灸様と聖様ではありませんか」

その声に灸と聖は振り向き、顔を綻ばせた。

「金魚が」

「結^{ゆわえ}じゃん、久し振り」

結と呼ばれたその人影は、あでやかな着物とつややかな髪を持つ女だった。その身は赤い金魚の化身である。

「はい、今夜は集会と言うことで、私も久々に端池から上がって参りました」

「端池かあ、懐かしいな」

照れたように微笑する結を見て、聖が目を細める。

実はこの結、地上で動けなくなっていたところを聖に助けられた事がある。

「ええ。とても」

「そう言えば金魚、黒い奴はどうした」

そのやり取りを聞いて思い出したように灸が結に訊ねる。

「ああ、掬^{むすび}なら今日は体調が優れないと言うので、端池でおとなしくしております」

掬、とは結のパートナーで、黒い金魚である。

「今度治りましたら私も掬も隊列に参加します」

「ああ。頼む」

そして結と掬は、やはりその能力を買われて灸や聖と共に敵と戦っているのである。

「そら、集会が始まるぞ」

誰かの掛け声で、大広間は一気に静まった。

01 (後書き)

文章力皆無ですがしばらくの間お付き合い下さい。
更新速度は激遅です

しんと静まった大広間。皆が皆、広間の中央辺りにある一段高くなつたところに注目する。

ふとその空中の空間が歪んだかと思えば、そこから純白の衣装に身を包み、狐の耳と九つの尻尾を生やした美しい女が降りてきた。この女こそが白狐。神出鬼没のリーダーである。

白狐の登場に静かにざわめく聴衆たち。それは灸と聖、結も例外ではなく。

「白狐様……」

と、灸などもう恍惚状態に陥っている程だ。

その聴衆たちを優しい目で見つめ、白狐は手に持っている扇子をすつと広げた。途端に空気が変わり、ざわめいていた妖怪たちが静かになる。

「ごきげんよう。今宵このように集って頂けたこと、私は妖怪町の長として光栄に思います」

透き通り天まで昇っていくような声で、白狐は言う。それだけで笑顔になる妖怪たち。白狐の声は、大広間を支配していく。

「皆ももう知っているでしょう。我が半身、そして同じくこの町の長である黒狐が何者かの手によって攫われました」

「ごおっと、まるで竜巻のように敵への憎悪と黒狐への心配が渦巻く。」

「これは由々しき事態です。私と戦闘部隊は一刻も早く黒狐を救い出すため、努力しております。ですから……どうか、皆は仲間割れなどせず、敵襲に備えて用意を、準備をお願いいたします」

はい、と妖怪たち皆が一糸乱れぬ返事をした。

集会の後しばらくして、戦闘部隊の隊員は白狐に呼び出された。

灸と聖はそれに応え、武器を持って町のはずれにある白狐の屋敷に集まった。

「皆、おりますか？」

闇よりも暗い部屋の中、白狐が確認する。

「……はっ」「……」

その問いに各々が返答をし、会議は始まった。

灸と聖は白狐の側にひざまずき、一言一句聞き逃すまいと耳を立てていた。

人間では視界の利かない闇も、妖怪ならばまるで昼間のように見渡せる。

さほど広くもない部屋の中にいたのは、妖怪町の中でも一二を競う強者ばかり。灸と聖はもちろんのこと、結や調子の悪いと言う掬河童や猫又など人間にも知られている妖怪など名だたる者たちである。

それらが皆一同に介して、白狐の言葉に耳を傾けている。

「黒狐を攫ったのは、梢一団じゃ」

誰かがそう口に出した。途端に皆が凍りつく。

梢一団とは、人間達の集まり。そこへ入った人間はなぜか妖怪の姿が見えるようになるという。そしてその一団の一番厄介なところは、

「木代様の血にや、手出しできん」

大蛇の告げたとおり、梢一団全員がある血筋の人間だと言うことだ。

その血筋の大本である先祖木代全は、かつてこの辺りに生息し悪さをはたらいていた妖怪たちを、安全な妖怪町を作ってそこへ住まわせてくれた人物である。

木代全は妖怪を見る以外に何も能力を持っていなかったのだが、妖怪にそこまで尽くしてくれた全に妖怪町の妖怪たちは忠誠を誓い、今後木代の血筋には手出しをしないと云う約束をしていた。

が、木代の血筋が代を重ねるにつれてなぜか妖怪町の妖怪を捕え

たり倒したりするようになってしまい、妖怪たちはほとほと手を焼いているのである。

今まではまだ妖怪町に深刻な被害が出ていなかったが、今回は黒狐誘拐だ。ここまでされては黙ってはられない、のだが。

「木代様の血には勿論手を出してはなりません」

約束を破る、と言う行為は妖怪にとって死を表すのだ。

「しかし、黒狐は取り戻さなければいけません」

苦々しい顔で白狐は口を開いた。

「皆、人を傷つけないように黒狐を救い出すことはできますか」

それは白狐にとって、苦渋の決断だった。

いずれにせよ、犠牲を伴うことは間違いない。

下手をしたら全滅してしまうかもしれない。

白狐はそう考えながら、それでもそう言った。

稍一団がそれだけ強いということでもあるが、所詮は人間。集団になった妖怪たちには敵うはずがないのだ。しかし、妖怪たちは手を出さない。

なぜ自分の命が脅かされているというのに、そこまでして約束を守るのか。

理由はない。妖怪たちにとって、約束とはそこまで重いものなのだ。

それが自分たちに良くしてくれた人間との約束ならば、さらに。

白狐の脳裏には遙か昔のことが鮮明に蘇っていた。自分たちを安全な所まで連れて行ってくれた木代全の、その顔の細部まで。

「お願い、できますか」

白狐はもう一度言った。それは自らの覚悟を示した一言。そして、自分の為、この町の為に集う妖怪たちの覚悟を試した一言。

「……はっ」「」

妖怪たちは闇夜に浮かぶような白狐の必死な顔を見て、感化され

たかのように返事を揃わせた。

空が白んでくる。

夜が明けた。ここからは、人間の時間だ。

「よう黒狐、気分はどうだい？」

どこかの薄暗い檻の中、うずくまっていた黒い狐が人間の声にゆつくりと目を開いた。

その目は真紅。喻えられるのは、深い血の色。

しかし開いた目は力を失ったようにすぐ閉じられる。

「良いわけねえか。クスリが効いてるんだからよう」
げらげら、とその男は下品に笑うと言った。

「あ、そおだ。その檻、あんま触んないほうがいいぜ？ピリツときちまうからな……って、お前はもう経験済みかあ」
げらげらげら。

しかし黒い狐はびくりとも動かない。

「ほつらゆつくりお休み、金蔓さん」

節をつけたように、男はそう言った。

「何なら白狐も捕まえるかあ？」

男がそう言った途端、黒い狐の目がカツと開かれる。

間にある檻も気にせず男に飛び掛ろうとする、が、電流にはじかれ無様に地面に這いつくばった。

「おつと危ねえ危ねえ。あんま体当たりして死んでくれるなよ、報酬が減るからさ」

わざとらしく黒い狐の体当たりを避ける振りをし、男は檻のある部屋から出ていった。

げらげら、と笑いながら。

02 (後書き)

いきなりクライマックスのような……

一応、灸が主人公のつもりです

次の夜、隠密行動に長けた妖怪数名が妖怪町の外に拠点を構えている梢一団の偵察から帰って来た。

白狐は黒狐の様子を探るために、前夜の集会から寝もせず占術せんじゆつと祈禱きとうを繰り返している。今までの情報で分かったことは、黒狐が何かの薬品で力を奪われどこかの檻の中へ閉じ込められているということだ。恐らくその檻は梢一団の拠点にあるだろうと予測される。

偵察によると一団の総人数は二十名程。そのうち何らかの異能者（木代全からの木代の血を継ぐ者は異能の類が発生しやすいが原因は不明）は確認できるだけで五名いると言う。

その拠点の場所は、妖怪町の南側にあるかなり大きな森の中。一団はその名の通り木などの植物を使った妖怪との戦闘を得意とする。最終の止めは銃だが。

そして一団の所有する武器は、毒矢と何かの薬品と猟銃二丁。これは概ね今までの戦闘の時と変わりはない。今までは犠牲を出しながらもこちらが勝利してきた。かといって油断は出来ない。問題は、少し薬品の量が今までよりも多いことだ。

前線に立つ灸ら戦闘部隊はその情報を受けて、戦法の練り直しを行うため再度白狐の屋敷に集まった。度重なる占術と祈禱で疲労している白狐は今回の会議には参加しない。

闇の中に、見慣れた顔が集まる。

誰からともなく、妖怪町の地図を前にしての意見が飛び交った。

「町の南方向に壁を造ってはどうか」

河童が水かきの手をぱたと振りながらそう言うと、

「いんにゃ、そんにゃことして間に梢一団に攻め込まれるにゃ」

猫又がその二又の尻尾を不機嫌そうに左右に振り振り口を動かす。

「だが守りを疎かにすると弱いのも確かじゃ」

攻撃より防御のほうが大事じゃぞ、と諭すように万年龜爺は口ひげを揺らした。

「かといって攻撃をしなければ一方的に攻め込まれるだけだがそこはどうだ、爺」

まるで皮肉るように大蛇が龜爺に疑問を提示する。

「決まつとろう、この甲羅びいしで防御は完璧じゃから後は攻撃するだけじゃ」

「おみやあみたいにや甲羅持っているのはおみやあだけにや龜爺つ！！」

ふみぎゃああつ、と我慢が切れたのか不穩に叫んで短気な猫又がその長い爪を出した。それはまるで鋼鉄のように輝いている。

対して万年龜爺は不敵に笑うと言った。

「やるか、小娘。その自慢の爪がこの甲羅に通用するかのう」

「いい度胸にや龜爺つ！その甲羅この猫又の帳とじ様が叩き割つてやるにやあつ！」

闇夜に輝く猫目と爪と龜爺の甲羅が乱闘を始めた。周りの妖怪たちは全く素知らぬ顔である。こんな事は会議では日常茶飯事。相手にするだけ自分に被害が及ぶので皆乱闘は無視するのが定石である。「おうら、もつとやれやれい」

見物人風情でけたけたと笑いながら水を煽っている（大事な会議なので酒は出ない）のは、黒い金魚の化身である掬だ。

「掬、そんなもの見ていないであなたも意見を出してください」

その掬をたしなめるのは極彩色の浴衣を纏まとう相方、結。こちらは赤い金魚の化身である。いつ見ても似合わない二人だなあ、と思いつつながら二人を見ているのは聖。

結局、まともな顔で地図を見つめているのは灸と結だけであった。

03 (後書き)

ちつとも進まない会議です。

実は会議はたくさんキャラクターが出せるので好きだったりします。

結局全く進まない会議の末、結果はいつもと同じになった。

防御力に秀でている者が町の南側に壁を築き、攻撃力に秀でているものは梢一団と戦闘に入るのだ。

会議が終わった後にはお互いボロボロの帳と亀爺、疲れた顔の灸と結、楽しそうな聖と掬にその他大多数が残された。皆その会議にいかに関与したかが一瞥しただけで理解できる顔である。

「……決戦の日取りは？」

へとへとに疲れながら灸が夜迷鳥に訊ねると、

「明後日です」

と、ツンとした表情と共に予言が返ってきた。夜迷鳥はいつもこのような態度なのだが、今の灸にはそれさえも苦痛である。

「だそうだ。セイ、武器の手入れをしておけ」

考えすぎで痛む頭を押さえながら、灸は聖に言った。ついでに護身用に使っていた刀も聖へ向かって放る。

「はい」

聖は心底嬉しそうにその刀を受け取ると、家へ向かって駆け出した。

灸はそれを見送りながら掬に話しかける。

「ところで黒金魚、体調は良いのか？」

「んあ？……ああ、昨日飲みすぎてよう」

どうやら掬の体調不良は二日酔いだったようだ。道理で今日は水ばかり飲んでいたはずである。

「そうか、なら良い」

「それよりよお、何か聖が考え込んでいたみたいだが……大丈夫か、あいつ？」

「セイが？」

灸にとってそれは初耳であった。家にいるときも、灸には聖は普通のように見えたのだ。

「おう。あいつも何も考えてないように見えて結構色々考えてるからなあ……。気にかけてやれよ、相方さん」

さらに考え込む灸にそう言って、掬はひらひらと手を振りながら端池の方へ歩いていった。

「……セイが考え事、か」

あいつもああ見えて成長してるのかも知れない。

灸はかすかに微笑むと、今度こそ家へと歩き出した。

「おかえりー」

土間で草履を脱いでいる音を聞きつけて聖が家の奥から灸に声をかける。

「ああ、ただいま」

普段通りの声だな、と思いながら灸はそれに返した。何も変わったことはなさそうだ。

いつものように奥の小部屋から武器の手入れをする音が聞こえてくる。

「セイ、あまり武器の手入ればかりしてないできちんと寝ろよ？」

灸は聖にそう言った。言っておかないと聖はいつまでも手入れをし続けるのだ。ひどいときは手入れをした格好のまま眠っていたりする。

「うん、わかってるー」

いつも通りの無邪気な声。

聖のその声を聞くと、灸はもうすぐ明ける空を少し眺めてから寝支度を始めた。

大体灸と聖とでは、いつも灸が早く眠る。その分灸は聖より早く起きるのだが……。

自分が眠った後、聖は一体何をしているのだろう。

灸はそう思いながら、眠りに付いた。

「キュウは本当に寝付きいいなあ」
灸が床についてからしばらくした後、自分と灸の刀を大事そうに抱えて聖は奥の小部屋から出てきた。

辺りはもう明け方と呼ぶのにも遅いような光に包まれている。

「よいしょつと」

静かにそう呟くと、聖は持っていたその刀のうち灸の方を寝ている灸の布団の横に置いた。

「灸の言った通り、僕も早めに寝ることにするね」

そう言って聖は灸の頭を撫で、着替えて灸の敷いてくれていた自分の布団にもぐりこむ。

「明後日は頑張ろうね、キュウ」

人間はいつも無力な分、ずるがしこ狡賢い。

黒狐は己の首に掛けられた首輪のような物を何とか外せないかと苦勞しながら、思った。

『クソツ……。取れん！』

思わず声まで出してしまう。

この首輪は梢一団の中の異能力を持つ者が作った物で、妖怪の首につけるとその妖怪は妖力を使えなくなってしまふ、という恐ろしい代物である。

その効力は妖力だけなら妖怪町随一と自負する黒狐も例外ではなく。

高压電流の流れる檻と併用されると、妖力で治癒するはずの傷も治らないので弱ってしまうのである。

『……………』

黒狐は首輪を取ることを諦め、少しでも体力を温存しようと丸まった。

ここまで派手に一団が動いているのだから、きっと助けが来るは

ずだと信じて。

04 (後書き)

いよいよ決戦です！

05 (前書き)

残虐な表現を含みます

月が良く見える、静かな夜だった。

灸と聖率いる戦闘部隊は、村の南に築かれた壁の前で最後の確認をしている。

「前衛は僕とキユウと猫又ね」

頑張るぞー、とでも言いたげに刀を高く上げる聖。危ない、とその頭を叩くのは灸である。

「ちよつとそこの黒狛犬、私には帳と言う高貴にゃにゃまえがあるのにゃあ！ちゃんと帳と読めにゃ」

猫又と一くりに片付けられたのがお気に召さないのか、帳は終始にゃあにゃあとうるさい。

「中衛は掬と蓮跳びの蛙」

「おうよ」

「了承した」

そんな猫など気にも掛けず灸が中衛の名を読み上げ、確認は進んでいく。

「後衛は私と大蛇ですね」

「遠距離は任せておけ」

最後に結が静かに括弧、確認は終了した。そして各自配置に付く。

「キユウは僕が守るからね」

「何を言っている。お前の方が守られる対象だろう？」

前衛の位置に立った灸と聖はそんな軽口を交わしながらゆっくりと自分の刀を抜いた。

先ほどの喧騒はどこへやら。

森はすっかり、静まり返っていた。

ガサガサと音を立てて何か闇の中を進んで来る。

『来ました、梢一団です。数はまず五人、次いで四人、最後に何か

の籠と六人。武器は猟銃一丁と刀二本、それと何かの薬品が四瓶です」

風に乗せられた夜迷鳥の音が戦闘部隊の耳に届く。人間には聞こえない程小さい音なので、梢一団に聞かれる心配は無い。灸と聖はそれを聞き取って既に抜いていた刀を構えた。

ガササツ

「行けっ！」

聖にそう指示しながら灸は動いた。構えた刀を横向きに構え直し、大上段に構えて敵の目前に躍り出た聖の後ろからその敵の武器を叩き割る。キンという高い音が辺りに響き渡った。

奇しくも、それが開戦の合図になった。敵も、味方も。

まるで自分たちの行動が読まれていたかのような攻撃に敵が怯んだ隙に、聖が構えていた刀をそのまま振り下ろす。頭からぱっくりと割れた無残な武器がまた一つ。

「……うっ、うああああ……」

戦場に立ち慣れていないのか、猟銃を構え引き金に指を掛けたままがたがたと震えている男を灸はその人外の膂力じりきょくに任せて問答無用にその銃を断つ。

暴発したのか二、三発の銃弾が飛び散り辺りの木々を散らしたが、そんなもの妖怪は気になどしない。

危害を加えられないのなら、と妖怪たちは自身が本来持っている多大なる存在感より発せられる限界までの緊張感で敵を気絶させていく。

「進め！」

気絶した敵とその武器を踏み越えながら灸が叫ぶと、了解と言う返事をする時間すら惜しいとも言わんばかりに嬉々とした表情で戦闘部隊が駆け出した。同時に町の壁の前に防衛隊がずらりと並ぶのを見て、灸も安堵し走り出す。まだ前線は破られていないらしい。

「怯むな、撃てえ　　ッ」

泡を食ったように梢一団の戦場指令官らしき薄い外套を纏った男が猟銃を持つ奴に命令をしているが、既に銃は部品の一つ一つまでぐっしよりと濡れており役には立たない。濡らしたのは結。お得意の水を操る戦法でさつさと火薬系を潰してしまった。

「……今回の先鋒は不慣れな奴ばかりなのか？」

近づいてくる敵を軽く刀で捌きながら灸は小さく呟いた。

「どおーも、そうらしいなあっ！どうしたお前ら殺り甲斐が無いぜえっ?!」

けたけたと薄気味悪く笑いながら薙刀を持った掬が灸の意見を採る。

それだけ、今回の襲撃はレベルが低かった。普段なら町の城壁まで追い込まれているはずで、いつも犠牲を出しながらもぎりぎりですぐ侵入を跳ね除けて来られたかな、と言う程の強さなのだ。鍛錬をして強くなったとは言え、灸は自分でもここまで上手くいくとは思っていなかった。

「いや……もしかすると、上手くいきすぎた……?」

皆景気良く敵の武器をまるで西瓜のようにぱかぱか割っている。

血腥くない不思議な戦闘の中、灸は考えた。そう言えば今回の襲撃、見慣れた顔がほとんどいなかった。襲撃に関わる、特に先鋒のメンバーは顔ぶれが毎回ほぼ変わることは無いのだ。今蓮跳びの蛙によって麻痺させられ、そのまま気絶させられた戦場司令官でさえも初めて見る顔だった。

灸がそこまで考えた時、森の向こうの方で何人かがごそそと動いた。灸のうなじの毛が逆立つ。

これは、悪い予感だ。

「畏だ、退けっ!!!」

灸は自分の読みの甘さに後悔しながら皆にそう指示した。

「退け　っ！」

そして、もう一度。

皆を危険から遠ざけるために灸はわざと敵の前に出、戦いに慣れていない敵の目を引き付ける。慣れている者ならともかく、素人にはこれで十分なはずだ。

灸はあからさまに浮き足立った敵の前で刀を横に大きく薙ぎながらもう一度、叫んだ。

「早く！逃げろ　　おっ！！！！」

それに呼応するように背後の仲間たちの気配が遠ざかっていくのを感じる。

良かった、皆を殺さずに済んだ。心の中で灸は強く思った。

同時に、森の奥で何かが光った。

「うっ……」

光を浴びると共に猛烈な息苦しさが灸を襲う。

あまりにもな苦しさに灸は思わず刀を取り落とし、喉を押さえた。

「く……かはっ……！！」

息が出来ない。

五感が遠くなっていく。

自己が認識できなくなりかけた、時。

「ほら、言っただろっ？」

誰かの声がした。途端に息苦しさがから開放される。

「……誰……だ？」

05 (後書き)

9 / 11 やらかしましたすみません！物語の進行自体は変わってませんが、とにかく白狐の言ったこと丸々忘れて敵に危害を加えてしまいました。以後気をつけます。自分のキャラの発言には十分注意しますもう忘れたりしません！

変えた部分

「敵の脇腹を」 「敵の武器を」

「血腥い臭い」 「キンという高い音」

「無残な死体」 「無残な武器」

「問答無用にその首を断つ」 「問答無用にその銃を断つ」

「敵の屍」 「気絶した敵とその武器」

「敵の頭」 「敵の武器」

「腹から一刀両断された」 「そのまま気絶させられた」

あと色々足しました。本当にすみません…

自分の身体が地面から浮いている感覚がする。いや、感覚ではない。実際にその人影が灸を抱きかかえているのだ。

「その玉は……妖怪のみに効果を発揮する……蚊取り線香みたいなものか」

まだ視界がぼんやりとする中、その人影は小さく独り言のように呟いた。途端になぜか目を灼くような光が消えたが、まだ灸の視覚は回復していないので人影はぼやけた人影としか認識できない。

「き……消えた?! 『光・妖怪弾』が! ……何をした! !」
向こうから敵と思しき慌てた声^{おぼ}がする。

「そんな変な名前なんだアレ。ネーミングセンス最悪だね。……それはさておき、僕はただそれに闇をぶつけて相殺しただけ。僕にはそれぐらいしか出来ないから」

自嘲するように軽く笑って、その人影が言った。

「でも……僕はキユウを守るって言ったからね」
人影はそう続ける。

灸は人影のその台詞で、そいつが誰なのか認識できた。が、理解は出来ない。

「セイか? ……セイなのか?」

よく聞くとその声も聖のものである。が、口調とその身に纏う雰囲気が全く違う。セイは、聖は……もっと何にも考えてなさそうな皆から愛される間抜けた性格だったではないか。

「そうさ、僕はセイ。聖だよ」

怪訝そうに訊ねる灸に聖はそう返すと、言った。

「キユウは女の子なんだから……たまには僕に任せてよ。皆も大丈夫だよ、町の中にいるから」

そして聖は灸を優しく自分の後ろに降ろすと、灸の腰の刀をすら

りと抜いた。

「ちよつと借りるね」

「……あ、ああ」

そうして聖は刀を両の手に持ち、構えた。

「お前らには負けない」

突然の大声。

その声が固まっていた周りの敵たちを動かした。

一気に囲まれる聖。その敵たちの目はどこか血走っていた。

「やれやれ、僕も嫌われたものだね」

その言葉と同時にぶんぶんと刀を振り回し、敵との間隔を空ける聖。

「あと、灸に危害を加えようとした奴は約束を破ってこの命を糧かてにしてまで殺すからね。それ以外は気絶させるだけだけど」

そう言つてにやりと口の端を歪め意地悪そうに笑う聖には、もう以前の聖の面影は無かった。

その言葉に敵がひるんだ隙に聖は自身の持つ「闇」の力を解放した。

月に照らされた聖の背後の影が不自然なほど濃く、昏くろくなる。

その影から真夏の陽炎のように何かが立ち昇った。ゆらり、とまわりの空間が揺らぐ。その揺らぎに合わせるように、細い、黒い糸のようなものが無数に敵の周りをうねり始める。

「この力、僕とキュウの両方の刀が無いと出来ないから一度やつてみたかつたんだよねー」

聖はまるで玩具を与えられて喜ぶ幼児のような事を呟く。そして、その両の手に持った刀を一振りすると叫んだ。

『闇の巻・空間移動 悪夢 持続時間半刻』

その不思議な響きを持つ言葉と同時に闇は敵全員の首に巻きつき、全ての敵がその場から姿を消した。

「まあ半刻一（30分）程悪夢を見せるぐらいなら約束には違反しないと思うし、僕が直接危害を加えたわけでもないしね。悪夢を見

るのは梢一団の勝手だし？僕には関係ないよなー。むしろ僕たち被害者だよなー？と言うわけで一生トラウマになるような夢見て来い人間。けたけたけたけた

その声は異空間にいるであろう彼らに届いているのかいないのか判らないがとりあえず聖はお茶目を装いそう言った。その様子を見ていた灸は、いよいよあの可愛かった頃の聖が懐かしくなってきた。何にせ裏聖、密度が濃すぎる。何のかと問えば性格の。

まあそれはともかく。

「……ありがとう、セイ。助かった」

とりあえず親しき仲にも礼儀あり。というわけで灸は聖にそう感謝した。

06 (後書き)

……聖がやばいことなってますがお気になさらずに。むしろスルーしてあげてください。

「うん、いいよ?」

聖は例の超絶悪笑顔で返答した。絶対こいつはあのセイと認めない!と、まあ常人(妖怪?)なら誰しもが思うようなことを心内で大きく叫ぶのは灸。少しはときめいてしまったということは秘密だ。なんてったつていつもの聖の十倍程かつこいい。が、それをこの悪聖に知られてしまったら最後何をされるかわからない。もうこいつは聖ではなくて穢けがれと呼んだ方がいいのではないかと灸は一人密かに思い始めていた。

「でもさあ、一人で突っ走るのは悪いと思うんだよね俺は。うん」

悪聖　もとい穢　の一人称が僕から俺に変化した。もう自分の本性を隠そうともしない穢に灸は呆れた。

「ところで穢……何でも無い何でも無いセイ、お前はそれが本性なのか?」

「うーん、まあ大雑把に言えばそうだよ?正確に言えば違うけどそれがどうかしたの?ていうかさっきの穢って何?」

灸に返答しながらも穢は灸の頭を撫でたり胸を揉んだりする行為をやめない。

「うーん、キュウはもうちょっと女の子らしくした方がいいと思うんだけどなあ。そもそも胸を揉まれて平然としているのは女子としてどうかと思う。まずその言葉遣いをどうにかしようよ」

更に自分で灸に質問をしておいて喋ることをやめない。

「放っておけ。……あと胸を揉む行為はセイだから許していることだ。お前は触るな。身体に障る」

「えー俺も一応聖なのにー」

そしてこの期に及んで自分のことをセイだとのたまう。

「姿形こそ同じであれお前がセイではないのは私には既に解っ

る。生まれてからずっと傍にいたのだ間違えようが無かるう。大体一応が付く時点でお前はセイではない！良いからその手を放せ！」
「はあい」

穢は聖を意識したのか可愛く言って灸から名残惜しそうに離れた。正直、気持ち悪い。

「それから黒狐様を助けに行くぞ！あと道すがらお前の正体を教える！」

灸は無駄なかつこよさの穢の顔から目を逸らして穢の持っている自分の刀を奪い取るようにかつさらうと自分の腰にある鞘に挿した。
「そんな怒らなくてもいいのに」

「何か言ったか？」

「いいえ、何にも」

そのようなやり取りを繰り返しながら、灸と穢は黒狐がいると思しき方向へと足を進めた。

穢によると、穢という者は「聖の、灸を守りたい」という心と、自分の力量では灸を守ることが出来ない、という思いの葛藤かつとうによって生まれた存在「なのだそうな」。

だから穢と聖は記憶も感情も共有しているし、灸を守りたいという強い想いは同じだそうだ。つまり、一般に見る物程は自己の人格が分かれていない曖昧あいまいな二重人格だと考えてもらったらしい。穢の方の人格に名前は付いていないということなので、灸は改めて穢を「穢」と命名した。あまりにも合いすぎている、と当人の穢には大うけだった。

「黒狐様、助けに来ました」

そんなことをしている間にももう灸と穢は黒狐の檻の前へと到着していた。

灸は目の前にある檻に声をかけた。そして檻を無理やり破壊する。

「キユウは本当に人使い荒いんだからー」

ぶつぶつと呟きながら闇を自由自在に操って、そこかしこの敵たちを一人残さず気絶後悪夢へ誘っている穢は灸の後ろから付いてきた。灸はもう穢さえいれば後の戦闘部隊はいらないのではないかと思っ。

『済まない。が……灸よ、この首輪を外してくれまいか？』

黒い狐の姿でのそりと檻から出てきた黒狐は、その首を伸して付けられている首輪を指した。

「はい」

灸は後ろの穢には構わず言われた事柄を実行した。途端に黒狐の姿が人型に変化する。

そこには、漆黒の狐耳に白狐と同じく九つの尻尾を生やし、優しげに微笑む若い男の姿があった。

「黒狐様っ！」

灸は黒狐の腕の中へと飛び込んでいく。黒狐はそれを優しく受け止めた。

「……これって俺、割に合わないんじゃないかね？」

向こうの方で静かに呟く穢の言葉は、聞かなかったことにしよう。

明け方近く、灸と元に戻った聖に黒狐は無事町の壁の前まで帰って来た。

「あの後、大丈夫でしたか……？灸様も、黒狐様も」

壁の上から心配でたまらないという顔で結が覗いている。

「大丈夫だった。心配するな」「ああ、有難う」

それに対し、輝かんばかりの笑顔で灸と黒狐は答えた。

「待つて待つて！僕はあつ？」

後ろから聖の声がするが、皆無視。

「良かった……きゃっ」

「痛えっ」

どき。とか、ぼさ。とか言う擬音と共に結の姿が壁の上から消えた。と同時に壁の向こうから掬の汚い悲鳴が。

結に怪我が無くて良かった、と思いながら灸は町の中に入った。

「皆、この身を梢一団の手中から救い出してくれたこと、感謝する」
いつかの大広間で黒狐が皆を前にし、深々と頭を下げた。めでた
いめでたいと酒の入った妖怪たちは恐れ多くも黒狐と白狐を囲み、
なぜか胴上げを始める。わっしょいわっしょいと言う声がまだ酒を
飲んでいない灸と聖の所まで聞こえてくる。その灸と聖は、二人き
りで自分たちの家にいた。そして、縁側で騒がしい朝を見つめてい
た。

「なあセイ」

「何、キユウ」

「ありがとう」

何気なく言い放った灸の言葉に聖の顔が真っ赤になる。

「ななな何をつ……」

「穢から聞いた。ずっとずっと、私を守りたいと思っていたそうだな」

「そそそれはそうだけど何でそれで……っ」

ぐるぐると目まぐるしく目まで回しあふたところたえる聖にあえて落ち着き、台詞を一つ一つ並べる灸。

「私は自分が強いと思っていた。だからお前をいつまでも守るつもりでいたし、自分は常に敵にやられる危険のある先駆けでいいとも思っていた」

そこまで言った所で灸は無理やり聖を立たせ、自分も立つ。

「だがたとえ妖怪だとしても……妖怪だからこそ男女の差、体格の差というものは顕著に表れる」

ほら、このように身長だけでも。と、灸は聖を見上げた。

「それを気にも留めず慢心していた私は救いようの無い馬鹿だ。だからそれに気付かせてくれて、ありがとう」

「う……うん……」

慌てる聖に軽く笑い、灸は聖と共にまた縁側に座る。

「んんっ……。今日は妖力も多く消費したし、疲れた」

くーっ、と伸びた灸は徐おもむきに立ち上がった。

「キユウ」

そして唐突にした背後からの聖の声に振り返る。

灸は、強引に自分の口の中に舌がねじ込まれるのを感じた。

「……何をやる」

灸はそう言った瞬間、妖力が流れ込んでくるのをまた感じる。その感覚はくすぐったいようであり気持ち良いようでもあり、灸は何と無くそのままだった。

「妖力の補給」

灸から口を離れた聖は、そう言った。

「セイ……じゃない、穢か」

「そつだよ」

にこりと怪しげに笑い、穢はくいつと灸のあごを持ち上げる。

「そこまでだ。それ以上は許さん」

そして二度目の口付けを穢がしようとした時、灸は穢の口を押さえた。

「借りはこれで返せたか？」

「ううん、まだまだ」

「そうか、なら……」

これで本当に終いだ。

そう言っつて多少顔を赤くしながら、今度は灸が穢に口を付けた。

「私はもう寝る」

そして照れ隠しのようにそう呟きながら、部屋に引っ込んでいった。

08 (後書き)

これにて第一章「黒狐」はお終いとなります。
ですがまだ続きますので、よろしくお願ひします。更新速度ももう少し早く出来るように頑張ってみます。

希望があれば、第一章終了時点の人物紹介を書いてみたいと思います。

09 (前書き)

第二部です

その日はやけに鴉カラスが多かった。

鴉共はがあがあとやかましく鳴き叫びながら夕暮れに差し掛かった妖怪町の上をぐるぐる旋回している。

灸は、その声によって叩き起こされた。

「……うるさい」

開口一番そう愚痴りながら小さくあくびをし、それでも布団が恋しくなってくる秋の入口、自分の精神力を振り絞って布団から出ることになった。

「……寒い」

寝起きで機嫌が悪く半眼になっている灸のその目は、迫力をいつもの二割増しにしている。

そして灸は、寝像悪く床に転がっている聖を勢い良く蹴飛ばしてから着替えを始めた。完璧なる八つ当たりである。

「くそっ……。こんな時間から開いてるのか？ 一体いつ来たら閉まっているんだっ！ 周りを見る周りを、店と言つていい店見渡す限り全部閉まってるだろう？ 客なんか来ないんだ周りを見習っておとなしく閉めておけ！」

「そんなに閉めている所が見たいなら一日中見張っていたらどうだ？ 現に客なら来ただろう。ところで灸。蛙、買うのかい？ 冷やかしなら帰ってくんな。こっちも忙しいんだ」

店の主のいない屋台に向かって叫ぶ灸。だが屋台の中からは声が聞こえてくる。

寝起きから続く灸のイライラもピークに達した原因は、こんな夜早くだと言うのに相変わらず店を開けている要の蛙串焼きの屋台にあった。

「忙しくなんか無いだろ……ああわかったわかった買うよ。六銅で
適当に聖と私の二人分見繕みつくろってくれ」

「ん、まいどあり」

せめてもの腹いせに、と灸はがま口から銅貨を六枚取り出すと力の
限り投げた。が、やはりその銅貨は屋台の中の空中で何かに飲み
込まれたかのように消えてしまう。

「はいこれ。二人で仲良く食べなよ」

何か微かな心配がしたかと思ったたら、いつの間にか茶色い紙袋が
灸の目の前に差し出されていた。灸はそれをむんずと掴むと後ろを
向き、言った。

「ありがとさん。今日は鴉が多いから店の前の串焼き、取られない
ようにしろよ」

「ご忠告どうも。そんな優しい灸に私からの贈り物だ」

要の声が灸の元に届くと同時に、灸の首には何か暖かいものが巻
かれていた。

「マフラー。これから寒くなるし、灸はそんな女らしいものを持っ
ていなかったと思って。大事にしろよ」

マフラー、か。首に巻くものはそう言えば持っていなかったな。

灸は首だけ後ろに向け、微かに笑った。

「ああ。大事にするよ」

「……と、言うわけでだな」

帰宅早々聖に詰め寄られてマフラーの説明をすることになってい
る灸。手に持っている串焼きが段々熱を失っていくのが分かる。

「えーキュウだけずるいつ。僕も要さんに言って作ってきてもらっ
つー！」

「いやセイ、別にこれは手作りじゃ決まったわけではないぞ」

「だってそうじゃないなら何でマフラーの模様にキュウの漢字が編
みこんであるのさー！」

「ん？……あ」

そう言えば見ていなかったが、確かにマフラーの真ん中に可愛らしい字体で「灸」と編みこんである。ご丁寧にもその漢字の周りには炎のシルエットも。これでは手作りではないと言いついで出来ぬ。町の編み物屋にもこのような柄のものは無かったはずだし……。

「じゃっ……じゃあ、僕もキュウに何か贈り物するーっ!!」

「そうか、頑張れ。とりあえず串焼きが冷めるから食べてしまおう」
「僕牛蛙四本！」

そう言った瞬間考えが食べ物にシフトする聖を見て、灸は聖のことと少し心配になった。

結局のところ要は灸と聖の食べる分をしつかり把握していたらしく、聖が自分の食べる分を取っても灸の分はまだ袋の中に十分残されていた。

「……悔しい程旨い」

もぐもぐと微妙な顔で口を動かしている灸を傍目に、その首にかかっているマフラーを恨みを込めるかのように凝視している聖の顔がやけに怖い。

「僕……僕、要さんに編み物教えてきてもらおう！」

「精々三日以内で諦めないようにな」

「そんなことしないもんっ！！」

すくつと立ち上がった聖は、いーっ、と綺麗な白い歯を灸に見せ付けてから勢い良く扉を開けて外へ飛び出して行く。

「まるで子供だな。穢とは比べ物にもならない」

その後ろ姿を開いたままの扉から眺めながら、灸は独り言ちた。

「たまには単独行動も悪くは無いだらう」

と、いう理論で灸は適当に町中をぶらぶらすることにした。何にせ灸の後ろにはいつも聖が付いているのだ。プライベートも個人情報プライベート報シも何もあつたものではない。

それならば聖がいけない今日ぐらいは。

そう思いながら灸は玄関を出た。扉は閉めるが、鍵は掛けない。そんなもの端はなから付いてなどいない。そもそも家とは即ち寢床。寢床に鍵を掛けるぐらいなら襲いに来た奴を返り討ちにしてくれる。妖怪町の妖怪たちは皆そう考えている。

「あっ！……久し振りだな、灸じゃねえか」

つらつらと思索ふけに耽りながら通りを歩いていた灸の耳に、久方ぶ

りに聞く声が飛び込んでくる。

「ん……黒金魚か」

それは黒い金魚の化身、掬である。いかにも眠そうにあくびなど
噛み殺しながら灸の方へと歩いてきた。

「そろそろ普通に掬って呼んでくれねえかなあ？」

「じゃあ掬、そついえは結はどうした」

「そつ簡単に変えられてもなあ……結なら何か用事があるとかで夜
早くから出かけちゃった」

「そつか。……で、お前は一体どう呼んで欲しいんだ」

「どつとでも」

軽く冗談を言い合いながらそのまま通りをすたすたと歩いていく
二人は、傍目からはいいコンビに見えた。

「ところで掬」

「ああ、結局そつちにしたのか」

「この頃鴉がやけに多くないか？」

自分の台詞を無視して続けられた灸の話に多少むつとしながら、
それでも掬は空を見上げる。

そこにはガアガア、ギアアギアアと玉の群れになった鴉が何十羽
も舞っていた。

「確かに多いなあ。誰か何かしたのか？」

「さあな。ただの鴉の気まぐれかも知れんし、お前の言つとおり誰
かが何かをしているのやも知れぬ」

「夜迷鳥の所に行つてみるかあ？」

ふ、とそろそろ白くなりそつな吐息を零しながら両者は対峙する。
「酔いどれ掬にしては良い案が出たな」

「あん？別に俺はいつも酔つちやあいねえよ。それに今は結の奴か
ら禁酒令が出てよう……あー酒が飲みてえ」

言いながらその無造作な髪の毛をわしゃわしゃと掻き回す掬に、
ため息を吐きつつ目を眇めて灸は言った。

「道理で掬がこんな所をうろろろしていたわけだ。お前、誰かに酒を無理やり飲ませてもらおうとでも考えていたな？」

「うぐ、何でその事を……！」

「態度を見ていたら解る。大方無理やり誘われたから断れなかったとか結には言い訳するつもりだろう」

「そこまで……。ああ降参降参。やっぱ灸には敵かなわねえか！。さすが頭のいい奴は違う」

「おだてても酒は出ないぞ」

「分かってるって」

「禁酒ならいくらでも付き合っがな」

「ああはいはい。……ってえ何で俺の周りにはこんな奴ばかり集まるんだよ」

「何か言っただか？」

「いいや。それよりも夜迷鳥の所に行くんだろ？早く行こう、なっ？」

わざとらしく言い繕つくう掬にもう一度ため息を吐きながら、灸は夜迷鳥の住んでいる森へと足を進めた。

11 (前書き)

灸と穢がやばいことになって来たんでR15つけます

「特に問題はありません」

森の中にちんまりと存在する小屋の扉を灸が叩いた所の反応がこれだ。

「……そうか」

もう夜迷鳥の能力については何も言うまい。恐らくは灸たちがここに来ること、あまつさえ質問の内容さえも予知していたのだろう。「町の業務には何ら支障などありませんのでご安心下さい」

きっぱりと宣言された夜迷鳥の予知に、灸は一抹の不安とそれにまつわる一つの疑問を感じた。

「と、言うことは自分たちには何かあるかもしれないという事か？」
「さあ」

全く抑揚の無い夜迷鳥の声からより明らかに何か嫌な予感。しかし夜迷鳥はこれ以上何も教えてくれはしないだろう、と灸は諦め、後ろの掬に「帰るぞ」と目配せする。

「へいへい」
呆れたような顔をしている掬は、しかし灸に逆らわず二人でおとなしく森からは退散することになった。

「つかーあ！何で夜迷鳥はこうも冷めてるかねえ！」

町中に入ったところでいきなり灸の隣を歩いてきた掬が叫びだす。
「……性格なんだから仕方が無いだろう。少なくとも穢よりはましだ」

「んあ？穢って誰だ？」

ぼろっと漏らしてしまった自己最高機密。灸のしまったという顔に更に喰い付く掬。

「け……穢は、穢はだな……ここに来る前の知り合いだ。……そうに違いない」

目を限りなく泳がせながら返答する灸。

「うとうん？お前にはここに来る前何も無かったと聞いたがなあ？それにお前ここに来たのは生まれて間もない赤ん坊の頃だろう？」

「いや、赤ん坊じゃない。既に一年は経っていた」

「十分赤ん坊だろうよ！で？その穢つてのは誰なんだって聞いて…

…」

「俺の名前呼んだ？」

元凶登場。灸が反射的にその声がした自分の背後に向けて回し蹴りを放つが、当たらない。逆に灸は後ろから優しく抱きしめられ、犬の耳とは別の人間の耳の方を優しく甘噛みされる。

「ひゃうっ……や、やめろっ！刺すぞ！」

顔を真っ赤にして灸は拳を振り回しながら背後の忌々しい知り合いに当てようとしているがやはり当たらない。

「恐いなあ。やめてよキュウ」

「だからキュウと呼ぶな！……あうあうう」

穢が灸の耳を軽く噛む度に灸の顔の紅潮度じつぱくどが増す。

それを見て掬は目を丸くした。

「ええ？聖？……え、何お前ら。関係逆じゃなかった……」

「ええいうるさい黙れ掬！こいつが穢だ！決してセイなどでは無い！」

「ん？キュウ、いつの間にそいつを名前なんかで呼ぶようになったのさ。君は俺のものだよな。そのイケナイお口はどうしたら俺の名前だけを呼んでくれるようになるのかな？」

そう言いながら穢は灸の口を自分の口で塞ぐ。つまりキス。しかもまた舌まで入ってくる。

いよいよ追い詰められた灸は自分の口内に侵入してきた舌を思いつきり噛み、その上で全力を込めて火球を放った。

「放れる変態！！」

はあはあと息も荒く火球の飛んでいった先を見て、それでもやはりしまったと言う顔をする灸。いくら自分の危機だと言っても、火の玉を全力で放ったのだ。聖の身体に傷がついてしまったかも知れない。

「あーもー本当にキウウは強引だなあ」

だがしかし、そんな心配は無用だった。ちゃっかりと穢は自分のスキルである闇で火の玉を侵食し、消してしまったのだ。

「……あのさあ灸、そろそろ俺頭と腹が痛くなってきたんだけど」
掬が灸に小声でそう言う。

「済まない掬。今度説明するから今は逃げてくれないか」

「ああおれも死にたきゃあ無いからな」

必要最低限の会話を交わすと、掬はすたこらと逃げ出した。

「あれ、あいつ逃げちゃったんだ」

「いいからセイと代われ穢」

「えー」

「えーじゃない」

「はい」

むくれて穢はそう言うつと、小さな焦土と化した通りの真ん中でへたりと座り込んだ。

「……………」

そして後には顔を真っ赤にさせた聖と灸だけが残された。

「キユウ……ごめんね？」

「……」

「まさかあんなことになるなんて……」

「……」

「……思っ
てなかつた、つて、反応してよキユウ！」

「……穢に言
つておけ。次したらセイごと殺す」

どこまでも冷淡な口調の灸に、涙目の聖が必死に言い繕つくろっている。現在二人は家の奥の小部屋で向かい合っている。

「さて本題だがセイ」

「ひゃううっ！」

今もう聖は極限状態にある。理由は、灸の清々しいまでの笑顔。この顔をしている灸が一番危ないと言
うことを聖は良く知っていた。「何か周りで変わったことはないか？ 鴉が増えたとか鴉が増えたとか鴉が増えたとか」

「どれだけ鴉増やしたいのさ……大丈夫、特に何も無いよ」

笑顔で壊れたように鴉が増えたと繰り返している灸に、思わずツッコミを入れてしまう聖。

「……特に？」

「あ、いやなんでも無い何も無いから何かあつたわけじゃないから徐に武器を取り出さないで！」

「あんの夜迷鳥、セイに何かしたら容赦しない……！」

「僕を守るってことは穢も一緒に守るって事だよ？……キユウはそれでもいいの？」

ぎりぎり
と刀を構えて危なげに鞘ひごと振り回す灸におずおずと聖はそう切り出した。

「良い訳ないだろう?!でもセイは守る!この命にかけても!」
「それ普通僕の台詞だよな?……ほんとに僕は大丈夫だから!」

「……………」
聖の言葉を咀嚼して嚙下して、ようやく落ち着く灸。安心して腰を落ち着けた灸のその横顔を見ながら聖は正座を崩し胡坐をかき、そして何かを思い出したように灸に声をかけた。

「ねえキユウ」

「何だ?」

「キユウは、何色が好き?」

「色……か。赤も好きだが、敢えて言うなら……あれだな、青緑。吸い込まれるような青緑が好きだ」

「ふうん、そうなんだ」

「何でそんなことを聞いたんだ?」

「ううん、何でもない」

屈託なく笑う聖を、灸はそれ以上追求することが出来なかった。どちらともなく笑い出す灸と聖。灸の首にはまだあのマフラーが揺れていた。

ガア、ガア…………。

夜も更け、そろそろ朝日が浮かぶ準備をし始める頃。

一羽の鴉が妖怪町一高い木の天辺で鳴いていた。

神木として妖怪たちに崇められているその木は、妖怪たちが崇めるだけあって葉がすべて落ちながら、それでも生きている大樹である。見た目は大きな枯れ木と何ら変わらない。

はずだった。そうでないとおかしいのだ。

なのに、今その鴉が鳴いている木は何故か葉があった。しかも、一枚や二枚ではない。その木はこんもりと針葉樹のような形になっている。

そしてよく見ると、その葉は本物の葉ではなかった。

何百羽、何千羽、果ては何万羽もの鴉たちによって形成される、
大きな鴉の群れだったのだ。

その大樹は神木のまま「鴉の木」となり、鴉たちの不穏な鳴き声
は妖怪町の平和を揺るがし始めた。

12 (後書き)

お知らせ：私鈴鳴月は学生でありまして……はい。中間テストが迫っております。

更新が遅れることが危惧されますが生温かく見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2076w/>

妖怪町騒動

2011年10月2日03時38分発行